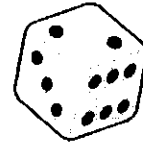


そろ目

今回、この通信の書きはじめに、「今度は何を話題にあげようかなあ」と思っていたところ、“2月22日、通算88号”を見て頭に浮かんだのがこの“そろ目”。なぜかしら、“ラッキー”と思ってしまいました。もともとは“揃目(そろいめ)”なのですが、語源が賭博に由来しており、「サイコロをふたつ同時に振って、同じ目



が出ることを意味しています。その博打におけるの隠語として、“そろい目”を“そろ目”と表現したようです。ちなみに2月22日が何の日か調べて見ました。“猫の日” “忍者の日” “おでんの日”などといった“語呂あわせ”も数多くありましたが、特に目をひいたのは、“天正遣欧少年使節がローマ教皇グレゴリウス13世に謁見した日”であったということ。天正13年(1585年)、旧暦の2月22日、イエズス会のアレッサンドロ・ヴァリニャーノが発案で、九州のキリシタン大名、大友宗麟、大村純忠、有馬晴信の名代として4名の少年がローマへ派遣され、ローマ法王に謁見した日なのです。名代は伊東マンショ(主席正使)、千々石ミゲル(正使)、中浦ジュリアン(副使)、原マルティノ(副使)の4名で、日野江城下に建てたセミナリヨで学ぶ生徒の中から選ばれています。彼らの正確な年齢は不詳ですが、13歳~14歳ぐらいだったそうです。

ここ数年、コロナの関係で中止されていますが、南島原市では、北有馬町の願心寺で開催される中学生を対象とした「セミナリヨ授業再現事業」への参加者の中から派遣団員を選考し、平成遣欧少年使節の海外派遣を行っています。(加津佐中の卒業生も派遣されています。)コロナ禍が終息し、こういった取り組みが再開されることを心から願っています。

3, 6, 9



この数字を見て、ピンときた人は流石です。そう、20日に閉幕した北京オリンピックで日本が獲得した金、銀、銅メダルの数です。今回のオリンピックは過去最大の109種目が行われたこと。毎日のように中継が行われており、感動のシーンや涙を流す選手の姿を数多く見ることが出来ました。特に印象に残った競技や選手は人それぞれだと思いますが、私が一番興味を持って見たのは“女子カーリング”でした。「ジャンプやフィギアは到底できないけど、あれなら

できそうな(当然、無理なのですが……)。頭脳戦、すごく面白いな、なるほどなるほど」と思いながら、見入っていました。予選リーグが混戦で、最終戦で敗れたときに、涙涙でインタビューに応じていましたが、韓国が敗れたことで、「決勝トーナメントに進める!」との報告を受け、涙を流しながら喜んでいました。あのシーンは印象的でした。よく『努力は報われる』といいます。まさしくその通りだったと思います。ただ、「報われない結果もある」というのも事実です。羽生選手や小平選手などが然りです。ただ、「報われない結果」をどうとらえるか、そこが問題です。「一流と呼ばれる選手は、それをバネにする力を持ってるな!」と感じた次第です。昔から『失敗は成功のもと』と言われます。「私達も、日々努力を重ねながら、失敗も経験しながら、着実に力をつけていく必要があるなあ!」とあらためて痛感したオリンピックでした。